

「選ばれる町」に

イージス・アシヨアは

いらぬ

山口県阿武町の決意

はなだ・のりひこ 一九五五年、山口県阿武町生まれ。高校卒業後、税務大学校広島研修所に進み、一九七五年、広島大学政経学部二部に入學。広島東税務署に勤務後、一九七六年、阿武町職員に。二〇一七年四月より阿武町長。

花田憲彦



世界 SEKAI 2020.1

町をあげての反対表明

——イージス・アシヨアの秋田と山口への突然の配備計画発表から二年が経過します。この間、地元・阿武町での動きはどうだったのでしょうか。

花田 二〇一七年暮れに、山口県の陸上自衛隊むつみ演習場（萩市・阿武町）と、秋田県の新屋演習場（秋田市）を候補地とする配備計画の発表があり、翌二〇一八年六月一日には、当時の防衛大臣政務官が山口県庁に来られ、村岡嗣政（つぐまさ）山口県知事、藤道健二（つぐみ）萩市長、阿武町長である私、それからそれぞれの議会の議長に対し、正式に話がありました。その後、阿武町でも住民説明会が立て続けにあり、六月二二日には当時の小野寺五典（いっのり）防衛大臣が山口県庁に来庁、さらに住民説明会が続ききました。

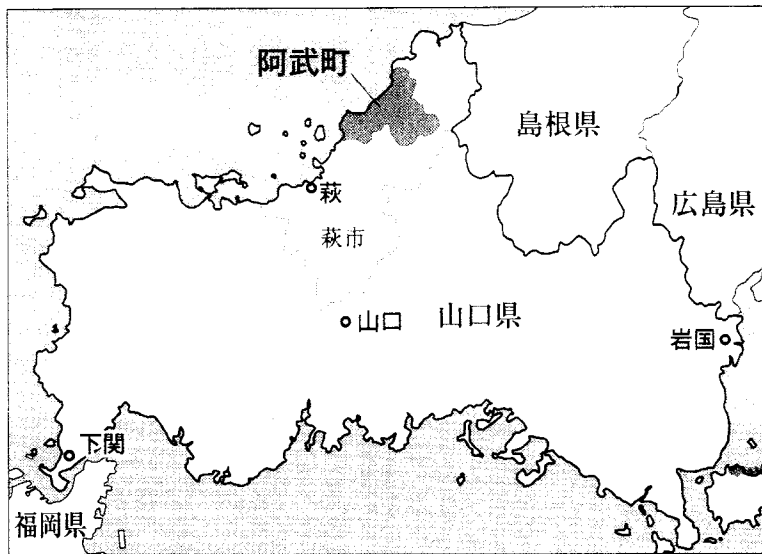
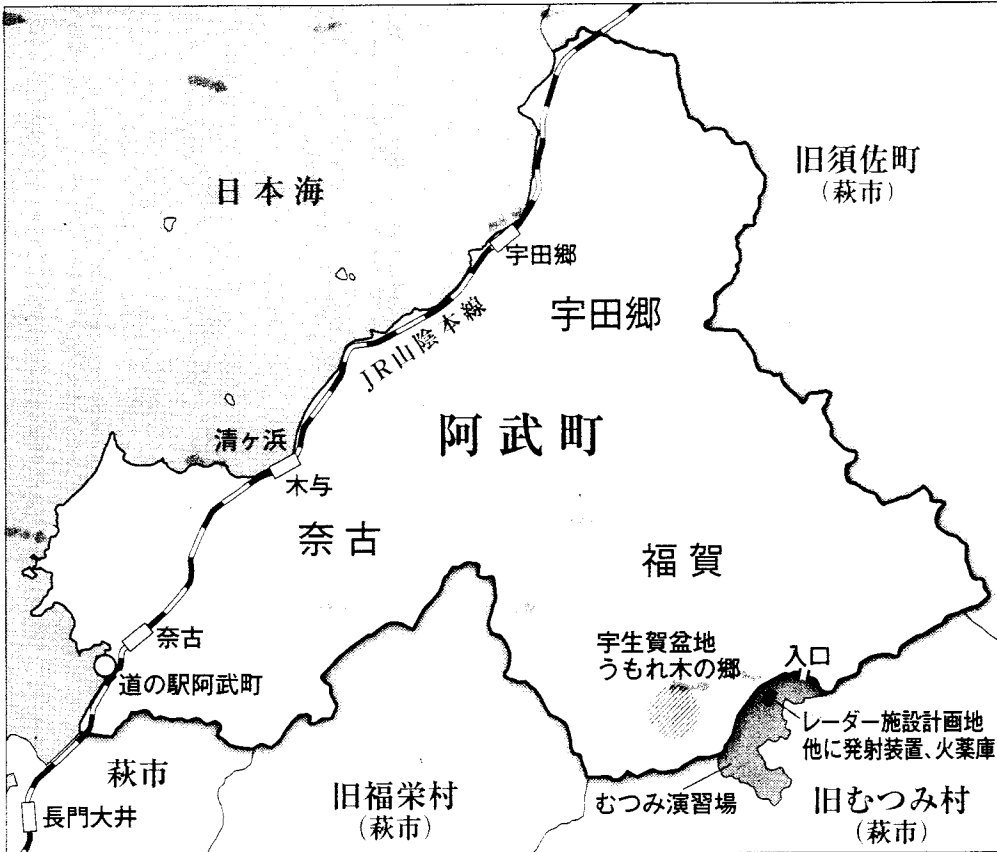
レーダーや迎撃ミサイル発射機を備えたイージス・アシヨアは、生活に大きな支障をもたらす、と最初に声を上げたの

は、阿武町の住民の長谷川...

は、阿武町宇生賀の集落の方たちでつくる農事組合法人「うもれ木の郷」の女性たちでした。反対の声はどんどん広がっています。むつみ演習場は日本海から直線距離で一〇キロほど山あいに入った場

所があり、阿武町の生活圏域は、警戒する北朝鮮方向の、まさに間にあるのです。阿武町内には、「阿武町民の会」(むつみ演習場へのイージス・アショア配備に反対する阿武町民の会)という阿武町民で構成する会ができています。阿武町は、人口三三〇〇人ほどの小さな町で、有権者は二〇一九年一〇月現在二八九

人ですが、その六割近くが町民の会の会員となり反対の意思を表明しています。残り四割の人が賛成かというところ、わからないという人や、そもそも声かけができていない方もいる。しかし、過半数が反対していることが重要です。民意はここで示されています。



〇一九年一〇月現在二八九

阿武町は三つの地域から成っています。海岸沿いで、町役場本町のある奈古地区。その北隣の宇田郷地区、イージス・アショア配備地区で山あいにある福賀地区。もちろん当該地区の福賀での反対は強く、有権者の四人に三人が町民の会会員ですが、他地区でも過半数が反対の意思表示をされています。

二〇一九年七月の参議院選挙でNHKが出口調査を行なった際、山口県ではイージス・アショアに賛成か反対かも併せて聞いていました。賛成は四九%、反対は五一%と拮抗していた。

し、高台からそのふもとの集落に地下水が流れていないと断定できるのでしょうか。地元の人たちは建設予定地の広大な面積がアスファルトやコンクリートで覆われ、重量のある建物・ミサイル関連施設が設置されれば、これまで浸透していた水が表層を流れてしまい、現在使っている地下水がこれまでどおりであるのか、大変心配しておられます。

防衛省はボーリング調査もしています。掘ったのはたかだか一五メートルほどで、地下水の調査ではなく、施設建設のための地盤調査としてとしか思えない、と、ここでも住民からの反発の声がありました。

ただ、私としては、イージス・アショアの影響の個別具体的なことで論争するつもりはないのです。例えば電磁波の影響については、学者によりいろいろな意見があることでしょう。私のような知識のない者が、誰かの発言に依拠しても、それは一つの考えにすぎず、別の高名な

学者はこう言っている、となりかねない。ですから、私としては、一番根拠を持って言えることで反論しています。それが町が推進してきたIターン、Uターン政策への影響です。

Iターン、Uターン政策への打撃

阿武町が「選ばれる町」として取り組んできた移住・定住政策ですね。

花田 私は町長になる前に四〇年間、町の職員として、Iターン、Uターン政策に取り組んできました。地方創生の一番の課題は、人口をいかに減らさないかということ。高齢化が進めば死亡は多く、出生はどうしても少ない。自然増減ではマイナスは必至です。それを補うには、社会増減でいかにプラスにするかが重要です。転入超過はそう望めませんが、過疎高齢化のすすむ市町にとって、転出を減らしてその差を小さくすることが、地方創生の最大の課題だと思います。

具体的な数字があります。平成一〇

(二九九八)年から平成一九(二〇〇七)年の一〇年間で、阿武町の転出と転入の差はマイナス三三三人でした。それが次の平成二〇(二〇〇八)年から平成二九(三〇一七)年の一〇年間で、マイナス四人となっています。Iターン、Uターン政策を進め、空き家活用をする「空き家バンク」など工夫もした結果です。過疎化が問題となるなか、人口減をほぼトンとにとどめることができた。これは町の自慢です。

町内の小中学校の子どもたちの構成を調査しているので、ご覧ください。

小学校 (阿武町全体)

Iターン	50人	25.8%
Uターン	100人	51.5%
地元	44人	22.7%
合計	194人	100.0%

中学校 (阿武町全体)

Iターン	13人	22.0%
Uターン	34人	57.6%
地元	12人	20.3%
合計	59人	100.0%

2019年5月末時点

小学校でいえば、阿武町にまったくゆかりのなかった、イターンのお子さんが五〇人。もし、これらの子どもたちがいなければ、どうなっていたか、ということとです。

阿武町にイターンされた方々と、話をする機会があります。彼らは、移住先を最初から阿武町に決めて来るわけではありません。何方所も調べ、それぞれを比べ、どこがいいか、自分に合う場所を選んでいいる。その人たちに、「もし、あなたにイージス・アショアが出来るという話があったら、阿武町を選びますか」と聞くと、「絶対選ばない。選択肢に入らない」とおっしゃいます。イージス・アショアが出来るかもしれないという話があった時点で、候補の俎上にも載らなくなってしまうのです。

もっと衝撃的だったのが、イターンした人たちの反応です。これからこの地域を担っていつてくれるだろう若者たちで、彼らとも話をしました。「もしこのイ

ジス・アショアの話が出ていたり、あるいはすでに配備されていたら、みんなは帰って来たかね?」。私は期待する答えがありました。「私たちはそれはそれとして、この町が好きだから帰ってきません」と。しかし違いました。「私たちが子どもがいますからね。イージス・アショアがあるんじゃないですか」と。と言います。故郷を愛し、情熱を持っている人です。イージス・アショアとは、いったいどれだけのものなのでしょう。

イターン、イターンした若手は、すでに産業を支え、あるいは消防団で町の治安・安全を支える中心的存在です。こうした人々が将来にわたって望めなくなれば、町が成り立たなくなってしまうのです。だから私は、町の浮沈をかけて反対するのです。

民の安心・安全を守るのが町

秋田県の適地調査では、基本データの

ずさんさに批判が集まり、二〇一九年七月の参議院選挙ではイージス・アショアに反対する候補が当選しました。山口県でも同様に標高データが異なるという問題が生じています。

花田 秋田の場合はあまりにお粗末ということでしたが、こちらの場合、本質的な問題ではありません。高台の標高が国土地理院の地図と二メートルの乖離があり、航空測量での再調査をしています。一二月に結果が発表され、説明会も行なわれるでしょうが、それ自体がイージス・アショア配備問題の本質ではありません。

ここで、私の基本的な立場を申し上げます。私は自民党の党員であり、国防の重要性は十分に理解しているつもりです。ただ、党の方針に全部賛成ということではありません。いろいろな意見があつて調整していくのが自民党の本来のよさです。総体としてはよくても、個々具体的なことではいろいろな意見がある。まし

て私は阿武町の町長です。町民の信託を受けているのです。

国に国防という大義があるのはわかる。しかし一方で、私の大義は阿武町の住民の安全・安心をいかに守るかということ。これにもとめるものがあれば、国が何と言おうが、自民党が何と言おうが、住民の立場にたつて物事を進めていくというのが基本姿勢です。それを崩しては町長たる意味がありません。

私は私なりに町民のみなさんから信頼していただいている実感をもっており、この進め方でよいと思っっているし、変えるつもりはありません。

先の電磁波や水の流れなどの問題は、町民の会の皆さんが、学者の方などの力を借り、国に対して質問を出しています。そちらについては町民のみなさんがしっかりやってくださっている。私は一点、**移住・定住対策に大きな支障を来す、町の将来にかかわる、ということ**を最大の論点として主張しています。

「選ばれる町」であるために

移住・定住政策の具体的取り組みを教えてください。

花田 地方行政を見る際に、「定住人口」「関係人口」といった言葉がありますが、イベントを通じて、町の人はもちろん、町外からも人が集まることはやってきました。

先日も、ニューヨークで活躍するミュージシャンを招いてのジャズコンサートがありました。会場の阿武町町民センターは五〇〇人しか入らないのに、なぜ阿武町？ と不思議がられる。そこに、山口県内、広島はもちろん、東京、福岡などからもお客さんが来られます。決してイターンを狙って始めたわけではありませんが、こうした文化イベントがしばしば行なわれる地であることが、イターン政策においてもじわりと効果を生んでいるのではないかと思います。

他にも、個人としても、町の職員とし

ても、いろいろな地域づくり活動にかかわってきました。例えば清ヶ浜きよがはまという美しいビーチの白砂を維持する「鳴き砂復活隊」。これは月一回の砂浜清掃活動です。道の駅阿武町を会場にした、イルミネーションフェスティバルももう一六回開催。ABUウォーターボイズという、地元の人たちによる町営プールでの年二回の公演も人気です。こうした蓄積があるから、阿武町を選んで移住して来られる方がいるのだと思います。

——仕事や住まいの紹介も行なっているのですね。

花田 職場は少ないです。ただ、いまの若い人たちには、収入のために自分の生き方を犠牲にしたくないという姿勢の人が結構おられる。自然の中で満ち足りた生活をしたい、子育てをしたい、と。細々と農業をやりながらでも、そういうライフスタイルを選ぶという人たちが来てくださいます。

町では新築の戸建て町営住宅も安く提

供していますし、空き家バンクもやっています。高校生以下の医療費は無償で、

二〇一九年一〇月からは、三歳未満を含む全年齢の保育の完全無償化を行ないました。若い夫婦も安心して共稼ぎができるようになり、子育て支援にもなり、地元の働き手も増え、喜ばれています。

——花田町長は、この地で生まれ育ったのですか。

花田 そうです。阿武町奈古地区の農家に、昭和三〇（一九五五）年に生まれました。広島で税務署員をしたこともありましたが、戻ってきました。私が一六歳、高校一年の夏に父親が病気で亡くなり、進学したかったけれど諦めました。そこに高校の先生が、「税務の学校では働きなから勉強ができる」とアドバイスをくれ、「そんなうまい話があるのかな」と思いましたが、本当でした。給料をもらって勉強。簿記計算はもちろん、憲法、刑法などの授業も受けました。その後、広島大学の夜間部を受験し、昼は税務署員と

して働きながら、夜は大学で勉強しました。

ずっと心につかえていたのは、故郷で母親が田んぼを一人で維持していたことです。私たちの年代では、長男が土地を守るという意識が強くなりました。そこにちょうど阿武町役場の職員募集があり、それを機に帰ってきたというわけです。

地域循環型の経済を目指して

——「道の駅」も阿武町が第一号だとか。

花田 平成三（一九九二）年、当時の建設省が試験的に一般道にもパーキングエリアを設けてみよう、と、全国一三カ所で実験を始めた一つが阿武町だったので。

ニーズはあるということで平成五（一九九三）年に道の駅の登録制度が始まり、全国で一〇〇カ所ほどが登録。実験段階からかかわっていた阿武町が第一号だとも言われています。

阿武町の道の駅には地元の鮮魚や野菜、加工品が並び、従業員も地元の雇用です。

私たちはなるべく町から出ていくものを減らし、地元で経済を循環させる「循環型社会」を目指しています。

コンビニは阿武町内にはありません。コンビニに並んでいる商品の利益は大手資本にいくだけで、町が潤うわけではありません。商品もどこか遠い国や地域で作られていて、地元に残るものがあるとすれば、わずかに店員の給料くらいです。破れバケツのように、カネは入っても外にそのまま出ていく。

でも、子どもたちに定住アンケートをとると、要望のトップは必ず「町にコンビニをつくってほしい」なのですが（笑）。——イターンの子からの要望ですか？

花田 Iターンも、Uターンも、地元の子ども、みんなです（笑）。コンビニのあるなしが、田舎か町かのバロメーターなのでしよう。田舎だからコンビニが成り立たないのではなく、意思をもってそのでないものを選択している。それを伝えていかないといいけませんね。